

平成28年7月15日

記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択について

文化審議会（馬淵 明子会長）は、7月15日に開催された同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、別紙のとおり記録作成等の措置を講ずべき無形文化財として1件を選択することについて文化庁長官に答申しましたのでお知らせします。

この結果、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択数は91件となります。

<担当> 文化庁文化財部伝統文化課

伝統文化課長

文化財管理指導官

主任文化財調査官（芸能部門）

振興係長

| | | | | |
|----|----|----|----|-----------|
| おお | たに | けい | すけ | |
| 大 | 谷 | 圭 | 介 | （内線 2859） |
| い | とう | しん | こ | |
| 伊 | 藤 | 進 | 吾 | （内線 2414） |
| みや | た | しげ | ゆき | |
| 宮 | 田 | 繁 | 幸 | （内線 2866） |
| くり | た | まさ | と | |
| 栗 | 田 | 直 | 人 | （内線 3104） |

電話： 03-5253-4111（代表）
03-6734-3104（直通）

I. 答申内容

(1) 記録作成等の措置^{そ ち}を講ずべき無形文化財の選択 (1 件)

| 名 称 | 関係技芸者の団体 | 所 在 地 |
|---|---|--------------------------------|
| <small>リゅうきゅうこてんそうきょく</small> 琉球古典箏曲 | <small>リゅうきゅうそうきょくこうようかい</small> 琉球箏曲興陽会 <small>リゅうきゅうそうきょくほぞんかい</small> 琉球箏曲保存会 <small>リゅうきゅうでんとうそうきょくりゅうげんかい</small> 琉球伝統箏曲琉絃会 | 沖縄県中頭郡北谷町 沖縄県宜野湾市 沖縄県那覇市 |

Ⅱ. 解説

〔（１）記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択〕

1. 琉球古典箏曲

（１）記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の概要

沖縄における^{そうきよく}箏曲の歴史は、18世紀初頭、^{いなみねせいじゆん}稲嶺盛淳が薩摩で習い覚えた十三弦^{こと}の^{こと}箏の曲を伝えたことに始まるとされる。1808年、^{さくほうし}冊封使^{ことひき}使^{ことひき}の宴で琴弾役を務めた^{なかもとこうか}仲本興嘉も薩摩で箏曲の教授を得ている。これら数次にわたり渡来したと考えられる曲には、箏の独奏曲10曲、すなわち器楽曲の「^{たきおとしすががき}滝落菅攪」「^{じすががき}地菅攪」「^{えどすががき}江戸菅攪」「^{ひょうしすががき}拍子菅攪」「^{さんやすががき}佐武也菅攪」「^{ろくだんすががき}六段菅攪」「^{しちだんすががき}七段菅攪」、声楽曲の「^{せんどうぶし}船頭節」「^{つしまぶし}対馬節」「^{げんじぶし}源氏節」があり、これらは、我が国の箏曲の歴史を知る上で貴重な伝承となっている。

一方、19世紀初めには^{さんしん}三線との合奏が行われ始め、箏は三線と^{りゅうか}琉歌による古典音楽の伴奏楽器として定着した。戦後は演奏人口が格段に増えたが、古典音楽や組踊^{おどり}、^{りゅうきゅう}琉球舞踊の伴奏楽器として演奏されることが^{もっぱ}専らであり、独奏曲の演奏機会は減少している。

以上のように、琉球古典箏曲は、芸能の変遷の過程を知る上に貴重なものであるが、その技芸の伝承状況の危うさから、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選択しようとするものである。

（２）関係技芸者の団体

①名 称 ^{りゅうきゅうそうきよくこうようかい}琉球箏曲興陽会

所在地 沖縄県中頭郡北谷町

②名 称 ^{りゅうきゅうそうきよくほぞんかい}琉球箏曲保存会

所在地 沖縄県宜野湾市

③名 称 ^{りゅうきゅうでんとうそうきよくりゅうげんかい}琉球伝統箏曲琉絃会

所在地 沖縄県那覇市

2. 参考 今回選択後の選択件数

| 区分 | 芸能 | 工芸技術 | 合計 |
|------|-----|------|-----|
| 選択件数 | 3 1 | 6 0 | 9 1 |